

パネルディスカッション

関西の特色、魅力を生かした これからの時代の国際交流、 人材交流の方向を探る

(司会)

コーディネーターの高阪先生は、京都大学大学院の終了ののちに、アジア経済研究所、京都大学東南アジア研究センターを経られまして、1994年より現職に就かれております。先生には一昨年、昨年につづきまして、3年間つづけてPREXシンポジウムのコーディネーターをお願いしております。

それから本日は、関西経済連合会の青柳常務理事、事務局長においでいただいております。青柳さんは松下電器での国際ビジネスの豊富なご経験に加えまして、1997年に関経連に活躍の場を移されておりますが、その後も、関経連のほうでも国際部長などを歴任されております。現在、関経連の国際交流本部長も兼務されておられます。長年にわたって経済界の国際交流に携わっておられる方でございます。

大阪国際会議場の山下顧問は、大学をご卒業ののちに、電通に入社をされました。そこで常務、専務、副社長と要職を歴任されて、2000年の8月から、昨年6月まで、大阪国際会議場の社長としてご活躍をされました。関西経済連合会では、本日のテーマにも関係ございますが、文化、観光委員会の委員長も務めておられます。

大阪市長室の木村国際担当部長は、大阪市の港湾局、それからドイツの駐在を含めまして、大阪市の中では、国際交流課長、国際経済担当部長を含めまして、長年にわたりまして、大阪におきまして、国際交流を担当されている方です。

最後になりましたけれど、関西国際交流団体協議会有田事務局長は、産経新聞の記者をへられまして、1997年から現職に就かれておられます。とくに現在は、NPOと企業、行政、あるいは教育機関との協同の促進でありますとか、民間レベルの国際交流事業のコーディネート、あるいはネットワークの推進に取り組まれております。それからコメンテーターとしまして、PREX会長の井上義國も参加させていただいております。それでは高阪先生、よろしくお願いいたします。

高阪 章

もう(このシンポジウムに出るのも)3回目だなという思いで聞いていたんですが、基調講演が非常におもしろくて、皆さんも非常に印象深くお聞きになったと思いますが、ああいう歴史の話を中学、高校のときも聞ききたかったなと思いました。歴史というと、つい暗記物という意識があったんですが、非常にビビッドにいまにつながるお話だったというふうに思います。

私なんか、私の専門は国際経済なんです。例えば、グローバル化という話をするとき、グローバル化というと、ついIT化だとか、1990年代以降の話のように思いますが、じつは産業革命ぐらゐのときは、第1回目のグローバル化

だったのですよというような話をします。そのときに一番大きなグローバル化のエンジンになっているのは技術革新です。先ほど北前船の話をして伺ったのですが、要するに輸送費というのは、どういう技術で、どういうところに、どういうスピードで物を運べるかというのにかかってくるわけです。それで（北前船は西回りに）下関から回って、（瀬戸内海を）こう来るといってお話だったんですが、（東回りの）太平洋側はやはり海が荒くて、当時の船の技術では太平洋側のところを定期航路で結ぶというのは非常にむずかしかったわけです。産業革命のときに、蒸気機関ができて、それからジャイロ・コンパス　これは15世紀、16世紀ですが　その辺の技術革新がずっと進んできて、大航海から大洋航海ができるようになって、それで現在に至って来たというわけです。ですからそういう話は、漠然と学生にしていたわけですが、足元の、こういう話を聞きますと「ああ、こうやって町ができて、こうやって（いわば）自治体警察と市民の関係があって、町民が自治、警察の一部を担って、町のガバナンスに加わってきた」という話を聞いて、ほんとうに私は何も知らなかったなどの思いを強くしました。

せっかくの機会でありますので、きょうのパネルディスカッションは、だいたい、こういうふうに話を進めていこうと思います。第1回目には、パネリストの方々から、いま、それぞれの団体で国際交流に携わっておられますので、その事業の内容のご紹介を含めて、現状を一度りお話いただこうと思います。それから、基調講演のあと、皆さんいっぱい質問があたりだと思います。それを踏まえて、ご自分のいまやっておられることとつなげて、このパネルディス

カッションのテーマでもあります、これからの国際交流に向けてのお話をさせていただく。そういう段取りで進めて行こうと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。ではまず、各団体での国際交流、それから人材交流のポイント、そして事業の紹介というところを第1番目のジョブとしまして、皆様、私の左の青柳さんから順番に簡単にご紹介をしていただきたいと思います。青柳さん、どうぞよろしく願いいたします。

青柳 明雄

関経連の青柳でございます。関経連で、人材育成と国際交流を長年、リードされてきました井上会長とか、国際会議場の山下顧問の横で、こういう話をするのは非常に辛いものがございしますが、私の経験も踏まえまして、今までの関経連の取り組みについて、ちょっとご紹介いたします。関経連の国際交流、あるいは人材交流というのは、大きくわけまして3つの柱があります。国際交流、これはもう、今のこういう経済情勢と言いますか、もう日常茶飯事あるいは四六時中、あるいは1日24時間、各企業が国際的な事業に携わっておりますので、どこまで国際交流ということ言えばいいのか、よくわからないんですが、ちょっと数字で申し上げますと、ここ3年ぐらいの平均値ですが、1年間に関経連が経済団体として、お受けする国際的なお客様、団体、これが年間に最低100件あります。中には昨年でしたか、ジョージ・W・ブッシュ大統領が来られるとか、あるいはフランスのシラク大統領が来られるとか、そういう超大物が来られることもありますし、ときには私は山東省のナントカ市の投資委員会で

ありますが、投資のセミナーをやりたいとか、大小、いろいろありますが、年間100件、これが関経連の事業報告書に載る件数が100件でして、事業報告に載らないものを入れると、およそ150件ぐらいは、年間、海外の方と、行き来しております。同時に、関経連として、ミッション、使節団を出すことがありますので、その辺を差し引きますと、もうほんとうに毎日のように日本語以外の言葉が、中国語なり、英語なりが、飛び交っているというのが、最近の経済界の状況であろうかと思えます。これが国際交流。次の柱が、人材育成でして、これはそれこそ井上会長が、リーダーシップを大いに発揮された分野ですが、1980年に関経連が、アセアン諸国に初めて使節団を出しました。ところで関経連が一番最初に海外にミッションを出したのが1969年ですから、そんなに古い話ではありませんが、1980年に当時の松下電器の松下正治さんをヘッドにアセアン諸国にミッションを出した。そのときに各国、とくにインドネシアで言われましたのが、アセアンにもたくさん経営者がいるんだけど、その当時のもてはやされていた日本的な経営を、よくわかっている人がいないんで、ぜひ、教えて欲しいというような要請を受けまして、同年の1980年の年末から、毎年、少しずつではありますが、アセアン各国から、経営者をお呼びして、日本の経営なり、日本の経営者の考え方、フィロソフィーなりをお話するというセミナーを始め、昨年で、もう26回目を迎えましたでしょうか。今までに参加された数が280名程度です。ここ10年ほどは、PREXさんに具体的に、その事業をお願いしているところですが、そういう人材育成事業、もう一つは、「アセアン海外研修」と言いまして、毎年、たくさ

ん日本に来ていただくわけにはいかないの、アセアン各国の企業の中堅層に対して、現地でのいろいろな経営スキルをお話するという、そういうアセアン海外研修を実施しております。こちらのほうは、延べ参加者が、これも約800名弱あったかと思えます。もう一つ、これは最近、2003年から始めた事業ですが、海外の、そういう方に対する人材育成に加えて、日本人で、よりアジア、あるいは中国で通用する方々の育成をしようといこととで始めましたが、「関経連アジア・ビジネススクール」ですかね、そういう名前で始めておりまして、これは毎年30人強ぐらいの、関西に拠点を置く、日本の企業の新入社後、10年ないし、10数年経った平均年齢が35歳前後の方々を集めて、アジアで通用する人材を育成しようという2週間ぐらいの大学院的なことをやっています。非常に好評でして、当初、3年でやめようと思ったんですが、非常にいいということで、これも毎年、夏から秋にかけてやっているんですが、すでに今年は、何月何日から始めるんだろうかというような、こういうご要請をいただくような、育成事業をやっています。もう一つありますのが、人材交流です。これは2001年から始めていますが、日本と中国の経営者の経済討論会をやっています。最初始めましたときは、中国の民営企業の経営者50名、日本側から200名ぐらいの、250名規模の討論会でしたが、これも年々、参加者が増えまして、昨年は、中国から200名強、日本側から300名を超える人が参加いたしましたので、500名規模の大規模な交流会になっています。もう一つ大事なのが、関西に進出された外資系企業の方、あるいは各国の外交関係、総領事さん、こういう外国の方と日本側の経営者の方に、お集まりいただ

く、これも年に3回くらいやっておりますが、関経連インターナショナルクラブというのをやっています、ここでも、その時々にあったテーマで意見交換をするという、以上のような主な活動を展開しているところです。

高阪 章

次は大阪国際会議場の山下顧問、どうぞ。

山下 和彦

脇田先生の基調講演に触発されまして、ちょっと前説をふらしていただきたいと思うんですが、古来から大阪の地というのは、たいへん交流の、日本でも最も大きな拠点であった。これは、どういうことかと言うと、必ず、日本人は、一生に1回くらいをお伊勢参りに行くわけですね、お伊勢講というのがあります、お伊勢参り、そのものは言ってみると、コンベンションみたいなものなんですね。コンベンションには必ずアフター・コンベンションとか、エクスカーションというのは、付き物であります、このお伊勢講のエクスカーションが、この大阪が、拠点であったんです。そして、そこで道頓堀の五座で芝居を見たり、旨いものを食ったり、そして、もうちょっと足を伸ばす人は、三十石船に乗って、京都へ行ったり、それから毎日、一便、じつは金毘羅船というのが出ていたんですね。金毘羅さんまで行って来るといったようなこともあった。そして、そういうことを全部やっていたのが、現在の交通公社みたいな仕事をやっていたのが、脇田先生のお話にあった日本橋、元の長町、そこに旅館街があります、その旅館街が、そういった仕事をしていたんです。

さらに彼らが、もっと、おもしろいことをやっているのは、土産物をたくさん買ってくるわけですから、それを旅の途中、たくさん持って帰るわけにはいきませんので、彼らが、家に着いたときには、届いているという現在の宅急便のような制度を、すでにやっていたという記録がありまして、そういう点では、常に大阪は、交流の拠点であったということです。そういうDNAが、この大阪近郊には渦巻いているということ的前提として考えていきたい。

それから、じつは、WTO、世界観光機関が、推測しておりますところによると、2020年には、世界中で、移動する人間が16億人に達するであろうと、こういうふうに言っています。これは現在のだいたい、3倍弱の人が、2020年には動いて、いわゆる観光ビッグバン、大交流時代が、訪れるということ、すでに予測しているわけです。ただ、前提としては、まずは、平和であること。これが戦争が起きるとか、あるいは、一時のSARSのような流行病がはやるとか、というようなことがない平和ということ。それからもう1つは、今以上に世界が豊かであるという前提がありますが、そういう前提が満たされれば、それぐらいの人が動くであろうという予測があります。これには1,2の理由がありまして、20世紀までの世界の人々のツケというか、そういうものの中で、非常に大きな問題の1つは、人間性の喪失というような問題があります。これをやはり、人間回帰というか、そういう動きを起こさなければいけない。第2番目のルネッサンスみたいなことを起こさなければならぬという時期に来ていると。それにはやはり、文化とか、教育、教養、こういった問題が非常に重要であるというところで、やはり、世界が大いに交流するということ

るに持っていかうという狙いもあるかと思
います。もう1つの大きな問題は、自然破壊、
環境破壊が、どんどん進んでいます。あと50
億年もつ地球が、いまのままではもう、300
年、500年しか持たないというような問題も
ある。産業の元根を変えていかなければいけ
ない。つまりは第2の産業革命のようなもの
を興していかなければならない時期にきてい
るところでありまして、そういう点では、こ
の観光を中心とする交流ということについて
は、殆どと言っていいほど、公害物質を排出
しない、なおかつ、場合によっては、自然をさら
にドレスアップしていくというエネルギーが高
まっていくわけですから、そういう方向で、こ
ういうものを進めていくタイミングであろう
かというような時期に入って来ておるとい
うことであります。しかも、そういうことは、政
府だとか、自治体とか、学会だとか、みんな言
っていますが、掛け声だけで、なかなか実ら
ない。ところが何と、驚くなかれ、神の手によ
るのか、あるいは人間の叡智というのか、そう
いうことはわかりませんが、日本で言いますと、
消費の実態のなかに、じつは驚くべき変化が起
きている。94年までは消費の過半数は、物で
あったんです。ところが95年からは非物に変
わってくるんです。非物の4本柱は、1つは医
療、介護、保険、スポーツなどの健康産業にゼ
ニがいる。それから情報通信産業にゼニが
いる。芸術産業にゼニがいます。そして観光、
ないしは観光にまつわる出費が増えてきたとい
うのが、4本柱なんです。これはいずれも公害など
は、縁の遠い、しかも人間性回復には、大いに
役に立つ文化的なキーワードというか、共通の
キーワードを持っている。これは不思議なこと
だと思いますが、人間の本能回帰とでも言っ

たら言いかと思いますが、そういう方向が出て
きたということは、うれしいことだなというふ
うに思うわけです。中国では、すでに85年ぐ
らいから、21世紀の基幹産業として、観光産
業を位置づけようということで、いろいろと整
備に力を入れてきて、そのコンセプトは3つあ
りまして、1つは国際収支の改善に大いに役に
立つ。2番目は環境破壊にやさしい産業である。
3番目は世界の人々と交流することによって、
人品骨柄が、そのうちに中国人も上がってきて、
やがて世界から尊敬を受ける民になるであろ
うというコンセプトなんです。これはもう、こ
のまま、そっくり日本にいただいてもいいぐら
いのコンセプトではないかと思いますが、国を
あげて、そういうことをやってきた結果、なん
と驚くなかれ、まだ、僅かにしか経っていま
せんが、訪れる人の数は3,000万を、ついに
越えまして、いまや世界第5位、イギリスを抜
いてなりました。1位はフランス、それからス
페인、イタリア、アメリカ、そして中国と。
6位イギリスが落ちてきている。わが日本は、
残念ながら32、33位でうろろうろしている。
ついに一昨年辺り、韓国にまで抜かれたとい
うような実態があります。この辺のところは、国
際収支の改善というような問題も考えて、中国
と同じようにやっていかなければいけないと
いうことです。そのためには、いろいろと、ま
ず、企画を考える。それから運営方法を考える。
そしてPRを考える。最後にいろいろプロモー
ションの技術を考えるという専門集団が、やは
り、この大阪の地に生まれなければならないん
じゃないか。いくつかの団体がありますが、
各々に長短があります。そういうのを一気通貫
で全部見られるようなシステムを官民あがて
つくらねばならないのではないかという気が

しています。残りの問題は、また、つづけて申し上げたいと思います。

高阪 章

山下さんのほうから、一挙に話がグローバルのほうにいきかけているのですが、もうちょっとネジを巻き戻したいと思いますが、次は大阪市市長室の木村さんのほうから大阪市を中心にした国際交流の現状についてお話を伺います。

木村 勇

最近、公共団体に国際交流担当とか、国際課という課ができています。たぶん、皆様方、最初に国際化とか、接するのは、たぶんパスポートのときだと思うんです。府県レベルでは、こういうパスポートに関しては国際化というところがやっていますので、そういうところへ、まず、行かれて、こういうセクションがあるんだなということになると思うんです。市町村になりますと、ちょっと違まして、恐らく姉妹都市とか、そういうことをやっていると、それで新聞などを見られて「ああ、こういうことをやっているのか」と、あるいはまた、大阪でしたら国際交流センターというのが上八にあるんですが、これは私どもが管轄しているんですが、多くの町で、国際交流センターとか、地域国際化協会ができていますので、そこへ行かれて、外国人に対する情報コーナーをつくったりやっているんだということを、たぶんご覧になっている方も多いと思います。なかなか役所の業務で、こういうことをやっているのを知らない方が多いんですが、私ども、どうして国際交流

というのをやるのかという、私どもにしても、これをやる前は、税金を使ってやっていますので、根本的なことを考えるんですが、国際交流というのは、外交とは違うと思うんです。外交というのは、公務員が、国益をかけてやるわけですね。ところが私ども、地方自治体、あるいは市民の方は、地域をよくしよう、あるいは自分たちの生活を、いまもう文化的なことを、皆さん、非常に興味をお持ちですから、外国の方と接して、自分も学ぼうと。日本の文化を紹介しようという、そういう動きが出てきましたので、恐らく、これは個人の方、地方自治体が、また、国とは違った意志を持ってやることじゃないかと思っています。私も、そういうことで、できたら、こういうことを通じて、大阪が発展したらいいなということをやっているんです。市民の方も、そういうことで、より生活が豊かになったらいいなということを思いつつやっています。こういう国際交流をする場合に、はっきり言いますと、こういうのは論理的には、なかなかむずかしい、こういう本を読んだらいいということはないんですが、私はいつも、思いながらやっていますのは、梅棹忠夫先生、いま民博の顧問をやっておられるんですが、この先生が書かれた「国際交流」という本があります。その中で書いておられるんですが、いつも私は、それを読んで、座右の銘にしているんです。まず、先生がおっしゃるのは、この時代というのは、戦後、変わってきたと。戦争前は、国際交流がなかった。役所まで、そんなセクションがなかったんです。戦後、できたものなんです。先生がおっしゃるのは、1964年に渡航の自由化だったんだと。ということは、一般の人も、ドルを買いやすくなったんです。

それによって、みんなが海外に行けるように

なった。大衆移動の時代が到来した。そういう国民的レベルで、その時代で初めて、国際交流を考えなければならないのではないかとおっしゃっています。それは、なぜかという、国際交流は外交ではないんで、国民一人ひとりに関わることでして、例えば、個人が海外の方と交流する。ということは個人を通じて、国民全体のイメージが作られるんじゃないか。つまり国際交流の場で、個人によって判断されるよりは、国籍よりも文化の問題ではないか。国際交流は、文化祭交流である、あるいは民族祭交流ではないかとおっしゃっています。私も、そうだと思うんです。とくに64年以来、山下先生もおっしゃったように、ものすごく動きが激しくなりましたね、国同士の。その中で、日本、例えば今日において、国において孤立が許される時代ではない。日本人だけの閉鎖的集団で、国際関係の中で孤立していくことはできない。異民族、異民族の付き合いを身につけなければならない。それが国際交流の意義で喫緊の問題である。ただ、どのような外国人であっても、人間であることを忘れては駄目だということを言っておられます。また、先生は国際交流は、なし崩しの戦争だと言っているんです。いわゆる piecemeal war と言っているんです。先生がおっしゃいますには、文化というのは価値の体系である。異なった価値観を見せられると、疑惑とか、不審の念に捕われる。国際交流とは、疑惑と不審の念を克服しながら、人間同士の交流を深めていくことである。即ち、心の中の闘争を内部で処理して、腕力、武力による闘争を未然に防ぐんだと、即ち、なし崩しの戦争、これを piecemeal war と先生は言っているんですが、自分が、個人の憎しみを国際交流によって、壊していくというんですか、そういうことによ

て、人間の付き合いをつくっていくんだということ、私はこれをいつもそう思っています。やはり、そういう場を、できるだけ私ども、税金を使ってやっていますので、つくらしていただいて、市民の方も入っていただいて、そういう交流をしながら、他国の民族の方を、より理解しながら、生活することによって、戦争を回避できるんじゃないかと。こういう意識は、やはり、持ちたいなと思っています。先生はの中で、在日外国人の方もおっしゃっておられます。いま日本も少子高齢化で、これからどうするんだと。外国人を入れるのか、入れないのか。これは非常に大きな問題だと思いますね。私ども国際交流をやっていると、とくにいま、自由貿易協定などで、フィリピン、あるいはマレーシア、タイなどと看護師の方を日本に入れようというような動きが出てきていまして、私は大阪におきましても、研修機関で、そういう方々を入れて日本語を学んでもらって、日本語力をつけてもらって、あれはむずかしいんです。日本の試験を通らないと駄目なんです。そういうふうなことが始まっています。ということは、外国人の労働問題というのは日々の問題になっていくと思います。そういう意味で、先生は20年前から、これは絶対に日本にとっては、必要なことなんだけど、まだ、考え方が確立されていないということをおっしゃっていました。私はいまも、そうだと思います。地方自治体では、権限がないんですが、私どもができることは、まず、できるだけ外国人が来られたら、日本でソフト・ランディングというんですかね、うまく生活をしていけるようになっていただきたいということで、例えば国際交流センターなどで相談コーナーを設けた。あるいは私ども、エンジョイ大阪と言いまして、8ヶ国語で、日

本に来たら、水道の栓の開け方とか、ガスの栓の開け方、外国の方が体を見ていただけるような病院をリストアップしたり、そういうことはしているんです。ということは国際交流も変わってきてまして、先ほど言いましたように個人個人が、心を開いていく一つの過程プラス外国人が、日本へ入ってこられた場合に、いかにソフト・ランディングしてもらうのか。当然、これからは日本も、先ほど言いましたように国のクローズを絶対にできないと思うんです。もちろん犯罪の問題も出てきます。これは私ども厳然たる事実だと思うんですが、それは、いくら入国管理を厳しくしても、なかなか避けられないところもあるんです。その場合は、できるだけソフト・ランディングしてもらおうということが、重要なんで、私ども役所としては、そういうことをしていきたいと思っています。役所ですから制度的なものがあるんです。予算とかです。ちょっと言いますと、大阪市の場合は、非常に財政危機ということで、新聞などで書かれているんですが、予算的には一般会計というところで、一応、いかほどの予算を組んでいるんですが、そのなかで国際交流的な事業と申しますと、これは、あまりおもしろくない話ですが、来年度は何をするのかということをお簡単に言いますと、例えば大阪市としては、いま一生懸命に努力しているんですが、世界陸上選手権大会というのが夏にあります。それをできるだけ、皆さんに楽しんでいただくということで、誘致が決っていますので、広報活動ですね、啓蒙活動をしたいと思っています。それからロボカップというのが、いま大阪ではロボット産業を発展させようと。大阪の産業も重厚長大から変わってきているんですが、ロボット産業というのは、鉄腕アトムとか、鉄人28号という30年

も、40年も前のイメージが変わってきてまして、いまはロボカップと言いまして、サッカーができるようなロボットですね。これをつくってみたり、これから日本も老人が多くなりますので、介護ができるようなロボットをつくっていかうと、そういうのをできるだけ大阪を拠点にしていきたいと考えています。あるいは、きょう皆さん方のお手元にサミットの紹介のちらしがありますね。サミットもいろいろ、こういう時代にやるのかという人もおられるんですが、大阪という名前を出すためには、もちろんサミットというのは大きなツールだと思います。当然、テロをどうするんだということもあります。これはやはり、危機管理という問題では、私どもは対応をしないと申せません。市民の方も、協力していただく必要があります。あるいはモノづくりというのが、大阪の得意だということをお言っているんですが、モノづくりサミットなどもできたら大阪でやりたい。それから先ほど山下顧問さんもおっしゃいました観光ですね。この大阪にも観光客を誘致したいと、とくに中国、韓国の方ですね。アジアというのは、いま観光ビッグバンで非常に大きな動きをやってます。とくに大阪港には、韓国から週に2便か3便だったかフェリーが釜山から着いているんです。それを使って、学生の方がいらっやっています。日韓関係は非常に大事なんです。まだまだ、いろんな問題が起こるたびに両方で火がついたりしています。そういうことを、やはり、変えていくには子供さんの交流が大事です。よく私どもは、修学旅行に来ていただくということをおやっています。それから姉妹都市ですが、私ども、サンフランシスコは今年50周年になるんですね。サンフランシスコ50周年というのは非常に古いんですが、ど

うして、こういう提携ができたかと言いますと、戦後、アメリカというのは、いろいろ問題がありますが、大した国だと思ったのは、第2次世界大戦が起こったのは、なぜかということ进行分析したときに、アイゼンハウアーが、ドイツと戦争をしたが、なぜか考えると、市民交流がなかったのではないかと、彼は言い出したんです。それをサンフランシスコの市長に「日本とやれよ」ということをおっしゃいまして、サンフランシスコは「じゃあ大阪とやろうか」ということで50年前に、そういう動きがあったんです。これは国際交流の輸入だったんだと思います。そういう動きがあったんで、今年が50年になりますので、そういう動きも利用して、大阪とサンフランシスコ、あるいは日米関係をよくするためにも交流ということをしてしたいと思います。

高阪 章

どうもありがとうございました。次はNPOの関西国際交流団体協議会の有田さんのほうから、その切り口で国際交流に関するお話を伺います。

有田 典代

PREXの皆さん、今日はNPOの立場として発言する機会を与えていただきまして、ありがとうございます。コーディネーターの進行に従い、最初に団体紹介をさせていただきます。

(特活)関西国際交流団体協議会は、英語名称を Kansai NPO Alliance といい、関西地域に拠点を置いて活動する国際交流・国際協力団体を支援する、日本で最初の連合体です。ネ

ットワークの重要性をいち早く認識して、1984年に設立し、今年で23年目になります。私どもの特徴は、民間の力で設立し、運営も民間でやっているということ。会員の構成は、NPO/NGO、国際交流協会、二国間交流協会、助成財団、労働組合、青年会議所、ロータリークラブ、関西経済同友会、連合大阪、JICA、国際交流基金、アメリカンセンターなど、市民、企業、経済団体、行政、内外の政府等、設立主体の多様な団体であること。2府4県の行政枠を超えて参加しているということで、全国で唯一のネットワーク組織となっています。PREXも会員に入っています。

豊かな地球市民社会の実現、並びにNPOが生き生きと活動できる市民社会の実現をめざしており、活動は、連合体ならではの事業、つまり、NPOの活動基盤整備や力量形成、市民の意識啓発と活動への参加促進、NPO/NGOと行政、企業、教育機関など多セクター間の協働の促進などに取り組んでいます。

藤田事務局長にご紹介いただきましたように、皆様の封筒の中に私どもの事業チラシや冊子を入れていただいておりますが、国際交流・人材交流に特化した事業を紹介しますと、まず取り組んだのが、国際交流・国際協力団体間のネットワークづくりと、国際交流情報誌の発行や関西の団体一覧の発行などの情報提供です。今から20数年前は、国際交流・国際協力への市民の関心も高くなく、また、どこに、どんな団体があるかわからないという状況でしたので、情報提供に取り組んだのです。インターネットの普及に伴い、情報誌はオピニオン誌『NPOジャーナル』へと変えました。皆様にもバックナンバーを入れさせていただいております。NPOジャーナルを発行した目的は、NPOへの

関心が高まり、設立のためのハウツー本やマネジメントに関する本は多く出ていますが、NPOが社会に果たす役割は何かということを考えるものは少ないということから、NPOのあり方や協働のための課題を社会に提起する本を出すことにしたのです。もうひとつは、大変微力ではありますが、関西の出版文化を興していきたい、関西からの発信に努めたいという思いで取り組んでいます。

また、市民参加の促進を目的として、関西で最大の国際協力の催し「ワン・ワールド・フェスティバル」の開催、アジアの担い手と交流する「アジア市民フォーラム」、アメリカ総領事館との共催で日米のNPOの経験交流を行う「日米NPOダイアログ」、全国の国際交流の実践者たちのエンパワメントとネットワーク化を図る会議の開催ほか、近年は増加する在住外国人や多文化を背景とする人たちの生活・教育支援等に取り組んでいます。さらにNPOの力量形成のためのマネジメントセミナーやアドバイス、就職ガイダンス、NPOの拠点施設「piaNPO」の運営を行っています。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、この建物は大阪市港湾局の旧庁舎で、遊休施設の地域活性化策の公開コンペで、NPO拠点施設という提案をして、5年前から運営しています。PREXさんも入っていただいています。現在、26の団体が入居し、活動しておられます。

私どもの活動だけを紹介しましたが、関西の国際交流、国際協力活動について申しますと、活動が大変多様化しています。姉妹都市交流に代表される友好親善から、青少年交流、留学生や在住外国人との交流など国際理解を促進する活動、開発途上国・地域の人々の自立と開発を支援する協力活動、開発教育や国際理解教育

の推進、在住外国人の増加などによる多文化共生社会づくりの推進、そして、人権、環境、エネルギー、貧困、地域紛争など地球的規模の課題解決に向けた対話、課題解決のための市民の意識変革、ライフスタイルの変容を促す活動へと変化しています。また、活動が多様化することによって、担い手も多様化しました。既存の団体にボランティアや会員として参加するだけでなく、教師や弁護士、医師、看護師、農民、エンジニア、建築家、研究者といった人たちがそれぞれの専門性を生かすべく、自らNPOを設立するようになったのも近年の特徴です。あるいは労働組合、農協、生協、青年団、子ども会、婦人会といった既存の団体が、国際社会を視野におき、組織力を生かして国際的な活動を始めるようになる。在住外国人も日本社会におけるマイノリティとして支援対象となるだけでなく、自分たちのコミュニティをつくり、互助組織としての活動と日本社会に向けて問題提起や情報発信をするようになりまし。次の発言で関西の特徴と問題提起をさせていただけたらと思います。

高阪 章

どうもありがとうございました。いまはこのPREXの家主さんから(笑)のご報告でした。いま4人のパネリストの方から、それぞれのお立場から、ご自分の所属しておられる団体の事業の紹介を1つのコアにしてのお話をお聞きしました。ほんとうにこの協議会の中身が多様になってきているというお話もありましたが、この4人の方のお話をお伺いするだけでも、非常に多様な切り口で、どういふふうに、これからパネルディスカッションをや

っていくんだろうかと、皆さんもご心配になっているのではないかと、私もちょっと心配になっていますが、次は ここまで、それぞれの事業を中心にご紹介していただきましたので

そのお立場からでも、あるいは、もう少しフリーなお立場からでも結構です。きょうのパネルディスカッションのテーマは「関西の魅力を生かした新しい渦の創造」ということになっていますし、それから基調講演は「なにわの歴史から見た大阪の特色、魅力」ということでお話をいただきました。いま私がイントロをしゃべっている間に、皆さんに、もう一度、頭を切り換えていただきたいと思います。この関西の魅力、関西の持っている歴史的、文化的遺産ストックですね。こういうものと、これからの人材交流、国際交流をどう考えていくのかという

脇田先生のお話、なかなか深遠で、歴史的にもすごいロングスパンですので いまわれわれが直面している問題と、どうつなげていくのかを考えてみたいと思います。

なかなかむずかしいところがあると思います。(手始めに)私の一番最近の、まだナマな印象をお話ししますと、1週間ぐらい前に、ロンドンに、ちょっと行って来ました。そのさらに1週間ぐらい前に、ニューヨークとボストンに、ちょっと行って来たんですが、ニューヨークに1週間いて、その間にボストンと往復しました。アメリカの国内線での移動というのは、たいへんだなということをしみじみ感じたんですが、いわゆるテロ対策のためのセキュリティ・チェックが非常に厳しくって 毎回「ノー」と言われて、行きもそうでしたし、帰りも「ノー」と言われて 結局、ニューヨークからボストンに行っただけで、4回、セキュリティ・チェックを潜りぬけた勘定になりますから、

1週間の出張で8回、セキュリティ・チェックを潜りぬけるというのは、なかなかの経験でした。

それに比べるとロンドンに行ったときには、割と簡単で、もう直行便でしたし、国内での乗換えなんてなかったのも、一発だったんですが、ロンドンはすごく観光客が多くて、日本人も多いですし、ピカデリーサーカスという一番賑やかなところへ行きましたら、あっちこっちで、ソニーか、どこかのビデオカメラが青白く光って、たいへんだなと思いました。もっとも、とにかくポンドが高くてまいりました。だいたい、皆さん、外国へ着くと最初に外国の通貨に換えられると思うんですが、私もだいぶ旅ずれしていますので、タクシー代いくらかかるかとか、あんまり考えずに1万円をポンドに換えて、(降りるときに)払おうと思ったら、足りなくて、びっくりしました。50ポンドかかったんです。50ポンドというと、向こうの感覚でいうと5千円ぐらいだと思うんです。だいたい1ポンド=100円ぐらいの感覚だと思いますので。だけど1万円じゃあ、足りないんですね。35ポンドしか、1万円で換えられなかったんです。

つまり、為替レートの話をする、現在これは円安ですので国際収支の黒字要因です。先ほど、山下さんのお話の中で、(観光などサービス収支で)国際収支の改善をという話もありましたが、国際収支は日本は現在黒字ですから、そんなに改善しなくていいし、むしろもっと外で使ったほうがいいぐらいなものです。カネの面(国際収支)ではなく、ヒトの面での国際交流ということを考えるとき、グローバルな人の動きについていろんな立場のお話がありました。観光の話もありましたし、それから少子高齢化という人口変動の影響と外国人労働をど

う受け止めるかという話もありました。その他に、やはり、平和というのが非常に重要で、平和のためには相互理解が欠かせない。それからもう1つは観光産業における国際競争みたいな話もありました。いろんな切り口があると思いますが、脇田先生のお話の中に、そういういろんな切り口のところがつながりとして出てきていたと思いますので、ここはちょっと視点を変えて、「脇田先生のお話を伺った上で、関西の魅力、関西の文化・歴史遺産のストックを、どう今後の国際交流に生かすか」という視点で、それぞれまた、5分ぐらい、お話を伺いたと思います。まず、青柳さんからお願いします。

青柳 明雄

確か2002年だったと思うんですが、イタリアのミラノ市のアルベリティニ市長が、大阪市にお越しになりまして、当時の磯村市長と、大阪市庁舎でお会いになったことがありました。そのときに、アルベリティニ市長が磯村さんにおっしゃったことが、私は非常に印象的でした。じつはミラノ市の市庁舎というのは、行かれた方はご記憶かと思いますが、有名なスカラ座の前に、広場を挟んであります。その市庁舎の市長室から見てみると、毎朝、とにかくアルベリティニさんを見ると、必ず日本人がいるとおっしゃるんです。なぜ、そうかということを見るとスカラ座があって、要は文化があるからです。もう1つ、その市庁舎の、すぐ傍に、これも有名なドゥオモというアーケード街があります。超有名なブランドの店が、もうずらずら並んでいるアーケード街です。ドゥオモというのは大聖堂ですが、それで文化があって、ショッピングの、もう超有名な店が並んでいる

ショッピング・モールがあって、だからこのミラノにたくさんの日本人が来てくれるんだと。それで残念なことに磯村さんに向かって、そのアルベリティニさんがおっしゃったのは「ここから見て、何人、外国人が通っていますかね。その中にイタリア人がいますか？」と、こういうような話があったように聞いています。先ほどの脇田先生のお話じゃないですが、歴史的に文化があって、しかも、有名な商店街も、行こうと思ったら、残念ながら最近の大阪のミナミは、イタリアのブランドに席卷されていますが、そんな感じがありますが、ショッピングもできる、その辺が、どうも大阪の場合には、せっかくあるものを活かしていきっていないんじゃないかという気が私はいたします。私の経験から1つお話を申し上げますが、1990年代の始めにアメリカのジョージア州のアトランタに駐在をいたしました。これはアメリカの南部の町でして、風と共に去りぬで、ご記憶だと思うんですが、そのアトランタのど真ん中に伝統的な民家が1つ残されています。なぜ、その古い民家、日本でも、いろんな民家を残していますが、残してあるかということ、有名なアメリカ南部人のホスピタリティを示すものだということで残されているわけです。アメリカで言う、サザン・ホスピタリティというのは、南部人が非常に旅人をウエルカムします。ただし、ここがアメリカ人的な割り切りもありまして、家の建て方が、いわゆる日本でいう田の字型になっています。家の仕切りが田の字型。それで外側にベランダがあります。そのベランダの片隅に日本でいうなら、四畳半ぐらいの部屋がありまして、そこにベッドが1つと、それから新鮮な水を入れたボウルが置いてあります。遠くから、まだ、馬に乗ってくるような時代ですから、旅人がや

ってきた。夜になった「あそこに灯りが見えるな。何とか、あそこに泊めてもらおうかな」。ただし、夜は入らないでください。家にカギがかかっています。家の中は家族が団欒している。でも夜、邪魔をされたくないけれど、ちゃんとベランダの隅に、あなたのお泊りになるベッドがありますよ、新鮮な水がありますよ。そして、翌朝、その旅人を迎え入れて、朝食をサーブして、そのサーブする目的は何かというと「いまアメリカの北のほうでは、どんなことが起きているんでしょうか」と。南北戦争の直前ぐらいですから、北の問題は、リー将軍は？リンカーンは？というような情報を仕入れる。そのために受け入れた。それがいまだに残っているサザン・ホスピタリティということで、観光客、あるいは外から来る人を大事にするわけですが、そういうような非常に割り切っているように、大事にしている、そういう気持ちが大阪の人に、あるいは関西の人にまだ、残っていてほしいけれど、あるのかな。システムのできてきているのかと。私自身は高校時代に大阪の真中の天王寺にいましたから、大阪人をわかっているつもりですが、どうもその辺が、最近薄れているんじゃないかという気がいたします。

高阪 章

大阪にホスピタリティがあるのかという話なんですが、次は山下さん、どうぞ。

山下 和彦

2002年にクリントン政権の、国務次官補をやったハーバード大学の有名教授でジョセフ・S・ナイというのが「アメリカへの警告」

という本を出しているんです。要するに、イラン、イラク、あるいはアフガンなどの政策を批判しているわけですが、従来の、20世紀前半までの世界であるなら、超々大国のアメリカの軍事力、経済力、あるいは政治力をもってすれば、一たまりもない国であった。それがいまだに解決の兆しも出ないというのは、明らかに世の中が変わってきた証拠である。このことは、じつはピーター・ドラッカーが20年から30年前に予言しているわけです。「断絶の時代」という中で、絶対に変わりますよということを。これはもう、まさに如実に断絶のクライマックスに入ってきたというような感じが、私はしているわけですが、彼はこう言っているんです。「従来のようなハードパワーだけでは、もう世の中は、うまくいきません。だから要するに、そこに加うるにソフトパワーを持ってしなければならない」と言っているわけです。それで高阪先生のいわれた魅力という意味合いは、ソフトパワーというのを日本語に訳せれば、私は魅力じゃないかと思っているんです。魅力というのは、人をひきつけて止まぬ摩訶不思議なエネルギーですが、そういう魅力の交換というか、心の交流というものが、非常に大事な時代に入ってきたということではないかと思うわけです。じつは日本人は、そのことは、神代ながらの昔から、知っていたんです。これは例の岩戸神話がそうでありますけれど、天照大神(アマテラス)が岩戸にくぐもってしまって、出てきてもらわないといかないので、村一番の力持ちの天手力雄神(アメノタヂカラオ)が開けようとするけれど開かない。そこで八百万の神々が鳩首、協議をした結果、これはやはり内側から開けてもらわないとイカンと、そのためには岩戸の前で大音楽会をやろうと。天鈿女命(アメ

ノウズメ)のストリップまで入れて、どんじゃらどんじゃらやるという企画が当って、天照大神(アマテラス)がそっと開けてみた瞬間に、天手力雄神(アメノタヂカラオ)ががらがらと開けて、日がまた、昇ったというのが、岩戸神話であります。まさに世の中の問題というのは、今までは嫌がる扉を外からこじ開けてきたのが世界史の流れなんです。ところが、それが通じなくなった。あらためて扉の原理、原点に戻って、うちら側から開けてもらうような仕掛け、細工をしなければならぬ時代に入ってきたというのが、いままさに現代なんです。それが象徴的なのがアフガン、イラクだと。アメリカは政策を変えなければいけないと、こう言っているわけですが、われわれも、そういうソフトパワーというか、魅力的な仕掛け、細工を、どうするか。そして人々の心を、どう開いてもらうかというところが、交流時代の一番、元になる問題ではないか。交流、交流と言うけれど、そこが一番大事だと、そのためにまた、交流をやらなければならない。こういうことではなかるうかなというふうに思うわけです。それで交流のネタになるものは、いっぱいあります。例えばさっき言ったWTOの定義によるツーリズムという概念は、一番には一般観光、2番目にはイベント、さっきお話が出た今年の8月の世界陸上大会とか、あるいは、今年やりますが、世界華商大会、これは神戸と大阪でやりますが、こういう大イベントをやる。あるいはオリンピックもそうですし、博覧会もそうです。そういうものが必要だと。そして3番目にはコンベンション、これはとにかく、こういう時期に、大いに集まって、一生懸命にいろいろ問題点を討議すると言うことでありますが、コンベンションというのは、元々はラテン語で、イタリアあ

たりでやっていたんです。ローマ時代から。これはコンというのはウイズという、ベンチレートというのは風を入れる、酸素を入れる、元気良くするというのがコンベンションです。因みに、きょうのシンポジウムなんていうのは、これはギリシャ語で、シンポシス。これはシンポジウム、そのころのシンポジウムというのは、お酒を飲んで、ワイワイやるということになっていますので、できれば、このPREXのシンポジウムもお酒を飲んでワイワイやると、ギリシャの昔に戻って、というようなことも大事かなというふうに思いますが、そういうものなんですね。ですから、そういうことで新しいエネルギーを沸かしていこうということ。そして4番目に大事なものは、祭なんですね。祭りを疎かにしているけれど、大きいですよ。例えば神戸で、1995年から始まったルミナリエ、いまや2週間で500万人が来ています。500万人に費やすおカネは、もう500億円を優に越えているんです2週間で、昔からつづいている祇園祭、天神祭、2つ束になっても、これは敵わない。2つ合せて250万人ぐらいですが、そういう新しい祭を創造していく。例えば札幌の祭、ソーランよさこいなんていうのは、たかだか14年ですよ。14年前、1000人から始まっているんです。これがいまや200万人来ています。雪祭が、190万人ぐらいですから、ついに雪祭を抜いた。札幌市としては、もうやめるに、やめられない。こういうものをつくらぬといけない。大阪市が、関市長が、もうやめるといったって、やめるにやめられないというものを、つくらなければいけない。そういうことをトータルで、いろいろ皆さんが知恵を沸かして、やっていく。おもしろがって、そして魅力的な仕掛け、細工、こういうものを

つくっていく、そういう時代が、交流時代、大交流の非常に重要なエッセンスで、そのDNAは、とくに関西に色濃く渦巻いているということ、さっき申し上げたわけでありませうけれど、皆さんと一緒に、いろいろ考えようではないかということをご提言申し上げたいと考えます。

高阪 章

ありがとうございました。そのDNAを、どうやって生かすかという話なんです、つづいて木村さん。

木村 勇

先ほど、脇田先生からの文化の問題が出ましたので、とくに大阪の文化というのは、いかに発信するのか。私ども、国際交流のツールとして使えるのかどうか、ちょっと実例を紹介したいんです。いまお手元に日豪交流年事業誌というのを70部ほど持って来たんですが、じつは日豪交流年というのは2006年にありまして、私どもメルボルンが姉妹都市です。2003年に姉妹都市で、桐竹勘十郎さんをトップに、文楽の技芸員をお連れしまして、ちょっとお見せしたんですね。メルボルンで。ところがものすごく受けまして、子供さんまで、「あっ、人形おもしろいな」と、向こうではあやつり人形が、結構、はやっていますので、日本の文楽をお見せしたら、感性でわかるんですね。私が一番ショックだったのは、向こうの小学校で3年生ぐらいの子供に見せたら、拍手で鳴り止まないんです。日本では、こんなことはありません。日本で文楽といいますと、もう古いものだということで、大阪でも苦労しているんで

す、集客に。そういう例がありまして、私は2006年に何かしたいなと思っていたら、メルボルンから、ぜひ、文楽を持って来てほしい。20年近く前に見られたんですね。ただ非常におカネがかかるんです。私どもも、いま大阪市、おカネがないものですから、どうしようかと悩みながら、現地では、いろんな劇場もセットする。私どもはどうしようかということで、国際交流基金なり、文化庁、あるいは募金活動をして、何とか3000万円弱のおカネを集めて、日豪交流年事業でやったんです。その中で、大阪市の人のすばらしさを感じたのは、例えば、大阪の文化というのは文楽も、そうなんですが、上方浮世絵館というのが難波にありまして、これも個人の方が、自分で、浮世絵を集めて、展示をされているんです。そして私が声をかけますと、展示しなさいよと。「これは貴重なものですから、どうしたらいいですか」と言いますと、ある大阪の企業、コニカミノルタさんなんですが、協力をしていただいて、それをスキャンしたら、きれいに出来るはずだと。それをスキャンして30点持って行きました。それからまた、町の着物を教えている方が大阪におられますので、声をかけますと「じゃあ行ってあげよう」と。40の方が、自腹で、メルボルンへ行って、ぜひ、見せてあげようというような動きがありました。私は大阪人の力は、すごいなと思いました。私は大阪の人間ではないんですが、とくに大阪は最近、旦那衆の方が、いなくなって、先ほど、先生がおっしゃいましたが、船場の旦那衆が、いなくなってしまったと。そして文楽も衰退していったと思うんですが、その文楽を支える方が、これも文楽の技芸員の方が、NPOで行っていただいたんです。協会を通すとたいへんなんで。この日豪交流年

は、去年の8月にあったんですが、盆休みを使って行こうではないかということで、20の方が、行っていただけることになりました。着物を自分で教えておられる方が40人、それから上方浮世絵館の方から、全部一式貸していただいて、それをコピーして持っていったんです。当然、現地では非常な協力をしていただいたんですが、日豪交流で、合作で、劇場で私どもが、舞台装置をつくったりしながらやったんです。文楽というのは、たいへんな芸でして、たくさんの道具がいるわけです。それから背景もいるわけです。その背景も、大工さんを連れて行って、現地で作ろうということで、現地の市役所の方が、ホールを貸してくれました。そこで1週間前に、大道具の2の方が、現地で、材料を買って、それで障子まで作りました。いまその写真が載っていますが、現地の方に、みんな協力していただいたんです。「日本の文化はおもしろい」と。これはメルボルンというのは多文化の町でして、いろんな方がおられまして、おもしろいことに対しては、どんどん入っていただけるんです。それも、皆さん乗られました。ところが日本では文楽が、すごい芸術になってしまったんだと思います。江戸時代は気楽に文楽に行こうだったんですが、いまは文楽に行こうやないかというのは決してならないですよ。だから一般の人が文楽に行くというのは、もうよほど袴を着ていかないとという感じなんじゃないかな。ところが現地で、私が子供さんを集めて、三味線を引かせたり、人形を動かしたり、義太夫を聞かしたり、義太夫を聞くと、みんな笑うんです。お腹を痛がっているのと違うかというんです。セリフを英語で、これも私どもボランティアでやったんですが、英語で、出してあげたんです。それでわかった

ということでした。現地では八百屋お七と、壺阪観音をやったんです。壺阪観音を日本でやっても、おもしろくないと思うんですが、あれは非常にハッピーエンドで、観音さんが出てきたりしますと、わかってくれました。これはハッピーエンドやなと。それで八百屋お七は恋愛物語ですね。日本の女性の厳しい面と、壺阪観音はやさしい面を出しているんですが、メルボルンでほんとうにわかってもらいまして、やはり、文楽はすごいなと日本へ帰ってから思いました。ちゃんと、そういう設備をつくってやれば、外国人でもわかるんだと。小学校の子供さんでさえ、文楽はおもしろいと、三味線も引かしてあげたら、日本はこんなことをするのかということで、じつはこの仕事をやりまして、大阪の文化はすごいやないかと思いました。私は大阪人ではないんですが、大阪へ来たら、みなさん文楽、文楽というんで、見に行こうかなと思って、何回か見たんです。やはり10回ぐらい見ないとわかりません。ほんとうにすばらしい芸だと思いました。それが海外でも行ってわかっていただける。着物というのは日本のすごい文化です。それをお見せしたら、エレガント大阪だと。これは始めて聞きました。大阪がエレガントという言葉は、日本では絶対に聞きません。ダサイ大阪とか、メルボルンの方は、エレガント大阪と言ってくれまして、こんなふうに思ってくれるんだと思いました。そういうことがありまして、今度は2年後にメルボルンのほうから、ぜひ、現地で、古い着物を集めて、外国人と一緒に着物ショーをしようという提案が来ているんですが、こういうのを向こうから投げ掛けてくるというのは、日本の文化が決してバカにできないものだと思います。それから上方浮世絵も、モナシュ大学は非常にいい大学で、

レベル的には、世界的には東大よりも上の学校なんです、そこでも上方文化を研究しようという動きが出てきて、ということは、役人は税金を使って何をやっているのかと言いますと、そういう土壌づくりをしています。もしかしたら海外でも、日本文化、大阪の文化が、理解してくれる人が出てくるんじゃないかと思っているんですが、やはり、それは出てきましたね。ということ予算はないんですが、できるだけいろんなツールを使ってやれば、もしかしたら日本のソフトパワーアップに貢献するんじゃないかと思いつつ、これからも何をしようかと考えています。

高阪 章

有田さん、少し自由に、どうぞ。

有田 典代

関西の文化・歴史のストックをどう今後の国際交流に生かすかということですが、その前に関西の国際交流・協力活動の特徴を述べたいと思います。

関西国際交流団体協議会では2004年に創立20年を迎えたのを記念して、関西の国際交流・国際協力の歩みを記録し、将来に伝えることにしました。私たちの20年があるのは、その前の、長い国際交流・協力の取り組みがあるからだから、それまとめることにしたのです。関西における活動は、関西の豊かな歴史、文化、風土、産業などを背景として生まれたものが多く、東京や他の地方とは異なる様相がたくさんあります。特にこの20年間は日本の国際交流・国際協力活動が大きく発展・変遷した時代

です。国際交流・協力活動がある種の層に限られていた時代から、関わる人がきわめて多様化しました。また、市民公益活動という新しい社会的領域の存在とその担い手であるNPOが注目されるようになり、行政や企業のパートナーとして、役割への期待が高まるようになりました。

関西の活動をまとめる中で、脇田先生のお話にあったように、関西には古くからお上に頼らない自立・自助の気概を尊び、在野の精神を育んできた風土があり、それが今なお健在であることに気づかされました。政治や行政と一定の距離をとり、行政が機能しない場合でも「民の力」で解決を図る、まさに現在のNPO/NGOに通じる理念であり、行動指針です。また、社会的に関西を特徴づける諸条件も、市民活動の独自性や先進性に結びついて、活動に全国性を与えているものがあります。歴史的、地理的に密度の濃いアジアとの交流、在住外国人、特に在日コリアンの存在や同和問題の偏在などが市民による人権運動や人権教育、国際理解教育、国際交流、国際協力の活動を大きく前進させ、活動に深みを与えてきました。そして、それらの活動は、関西から国内外に発信することで、お互いに影響しあって、サポートしあってきました。分野を超えた連携と協力が関西では重層的に積み上げられてきました。そして、この蓄積された経験とノウハウが、阪神・淡路大震災で有効に働いて、日本全体のボランティア、NPOへの関心の高まりを導き出したといえると思います。さらに、関西特有の庶民感覚と人間臭さ、現場主義があります。関西のNPO/NGOは東京に比べると理論的に弱いと言われるますが、庶民感覚と人間臭さ、現場主義がNPO/NGOの活動に「理屈より実践」の気

風を吹き込んだといえると思います。

国際交流における関西の活動の特徴は、「民間主導の取り組み」が活発であることです。シンポジウムの最初のビデオ上映で関西の特徴が紹介されましたが、まだ触れられていないものがありますので、私の領域から紹介しますと、戦前では、「大阪に国際人を育てる学校を」と、実業家の手によって1921年に大阪外国語大学の前身である大阪外国語学校が設立されています。その跡地に、NPOの提言を受けて、関西の国際交流の拠点施設「大阪国際交流センター」が1987年に設立されました。1935年には財界によって関西日英協会が設立され、戦後の46年には大阪日米協会が設立され、以後、企業によって二国間交流団体が設立されていきます。国際交流財団の設立もめざましいものがあり、アジアの出版文化を支援する大同生命国際文化基金、留学生の奨学金支援をする松下国際財団、ノーベル賞に匹敵する国際的な賞を創設した松下科学技術財団、国際交流や芸術で地域の文化振興に貢献した活動を顕彰するサントリー文化財団などですが、こうした企業の動きは、企業の海外進出に相互理解を促進することが重要になったことと社会貢献の観点によるものでした。

また、大阪商工会議所は、1978年に大阪YWCAと一緒に留学生支援の草分けである留学生里親制度を開始していますし、91年には日本初の大阪コミュニティ財団を設立しています。毎日新聞社は創刊100年を記念して「毎日国際交流賞」を創設された。阪神・淡路大震災で外国人への情報提供の重要性が認識され、関西電力が中心となり、関西財界が支援して、日本初の多言語放送局「FMcocolo」が開局しました。これらは一部ですが、関

西が先駆的に取り組んだことが、全国に波及して言った事例は数多くあります。

もうひとつの特徴は、「人権教育と多文化共生社会への実践」です。在日韓国・朝鮮人が多く居住する関西では、人権施策と国際化施策を統合して多文化共生に取り組んでおり、90年代に新しく居住するようになった外国人を対象に国際化施策として取り組むようになった他地方とは状況が異なっています。従来の同和地区の識字学級や在日韓国・朝鮮人が多く在籍する中学校夜間学級の蓄積を生かした「識字・日本語学習」も、日本で先進的に取り組んできた関西の特徴です。また、在日コリアンの存在を尊重した日韓交流も活発です。

さらに、「アジア志向」も関西の特徴です。経済界とは異なる事例を申しますと、地域リーダーとなるアジアの農漁村の青年の受け入れや教育支援、女性の自立支援、医療協力、国レベルの支援が行ないにくかった時代にカンボジアやベトナム、ラオス、ビルマなどの復興を市民レベルで支援してきた活動など多様で、ほぼアジア全域をカバーしているといえます。国内においては、アジア理解を深めるための文化紹介、語学講座、8割以上をアジア出身者が占める留学生との交流が行われてきました。戦後間もない1950年に設立された大阪府日本中国友好協会は、日中国交正常化の実現や友好都市提携の締結への協力、中国人留学生の支援など、地道な人的交流を推進してきました。

では、日本の国際交流にとって関西はどのような意味があったのか、こうした特徴や蓄積をどのように今後の国際交流に生かすかということですが、1つには、関西の文化力です。関西は歴史と文化の宝庫であり、外国人との交流で日本文化の話になると、やはり関西に行かな

いと実物は見られないと言われます。私たち関西人はその財産を再確認し、学習していく必要があると思います。2つめは、関西の人間味です。建前と本音が一緒であるというこの姿は守っていききたい。また、国際交流の大衆化です。国際交流は特別のものではないという気持ちです。「人様に喜ばれてなんぼ」の精神を持つ社会に生きていることを意識して接していきたいと思います。3つめは、関西の根っこそのものが国際交流であるということです。古くから国際交流は関西一円でも行われてきて、渡来人との交流、多文化共生社会、文化・技術の伝播などすべて経験しています。今後は関西が持つ豊かな文化と叡智と国際交流をどう融合していけるか、それを示さなければならない。4つめは、日本文化の教養と見識を持った人たちをもっと多く育成していかなければならない。自国の文化に深く関心を持つ人は、他国の文化にも関心を持ち、敬意を抱けるからです。それは単に文化への敬意だけでなく、その文化を創った人々への敬意につながる。つまり、人を大切にすることが文化を育てていくことなのです。

9・11のハイジャック犯は、ドイツ留学中にイスラム諸国に対する欧米の無理解と偏見に怒り、テロリストへと変貌していったと言われています。本来、国際相互理解を通じた平和を追求するはずの国際交流事業、留学生受け入れが、なぜ、巨大な憎悪を生み出してしまったのか。ドイツの国際文化交流政策の問題点は、国際イーコール海外と捉えることで、国内の異文化接触に対する目配りが欠けていたことだと言われています。これは決して他人事ではなく、日本も多文化を背景とする人たちが増加するなかで、多様な文化や宗教への理解が重要に

なってきます。重要な変化を誘発させることができる人を国際社会では「カタリスト」と言っています。化学用語で、触媒という意味ですが、擬人化されて、崇高な理念や計画のもとで、重要な変化を誘発させることができる人という意味で使われるようになりました。国際社会の抱える課題が年々深化し、国際交流・協力活動が重要になっているときに、私たちがこの関西で、日本で、アジアで、どのようなカタリストになれるかが大きな課題ではないかと思いません。

高阪 章

ありがとうございました。ではPREXの井上さん。コメントをどうぞ。

井上 義國

いろんな貴重なご意見をいただいています。有田さんの話の中で、民間主導でというので、いろんな例があげられましたが、PREXも、その1つでありまして、PREXは今年の4月で満17年、17年前に関西の志高き企業経営者が、寄進35億円のうち、80%を供出していただいた。17年間の間、職員を、毎年、9人から10人を手弁当で派遣していただいた。そういう支援、協力が、いまのPREXを支えているわけでありまして、関西の企業経営者というのは、大変志が高い。

今年2月、京都で、例年通り関西財界セミナーというのが開かれました。関西の企業経営者、300人程が集まって、いろんな問題について討議をしました。そのテーマというのが「気概ある国家、志高き企業」でありまして、誰かが

PREXの存在に気がつきまして、「PREXというのは、誰か官庁からの天下りがいるんですか」と。「いや、1人もいません。これはまったく民間でやっています」と答えました。ということでPREXのことは、あまりご存じなかった人に話をしましたら、関西の企業経営者というのは、志が高いなということで、もっともっと、国内でPRをしないといけないのではないかということで、財界セミナーの席でもPREXは何者であるかという説明をさせていただきました。ということで、もっともっとPREXもPRをし、いいことを、どんどんやっていかなければならないと考えています。

この「PREXシンポジウム」、今年で3回目ですが、今年は、やはり、日本の、関西のいいところを、われわれがもっともっと認識して、自信を持って、PRをしていかなければならないという考え方から、こういうテーマで開催しました。PREXに技術研修に来られる方、その方が、一度、関西に来たら、もう1回、大阪に行ってみたいな、神戸に行ってみたいな、京都に行ってみたいなと、そう思わせるには、どうしたらいいのか。単に技術研修だけではなく、せっかく関西にお越しになったんですから、関西のいいところを短い時間の間に、どれだけ印象づけることができるか。PREXも、関西プログラムというのを作りまして、短い期間に、研修生の方々が、どこに興味を持って、どう見学をしたいのか、楽しみたいのか、というプログラムを作りまして、それを選択できるというのを、どんどん中身を充実していきたいと考えています。

パリなんかは、1回、行ってみたいと思います。だれでも思います。あれは何もフランスの首都だから行ってみたいと思うわけではなく

て、都市の魅力があるから、行ってみたいと。1回行くと、また、2度目も行ってみたいと、また、行ってみたいと思う。そういう魅力は、どこから出てくるのかということは、先ほどからいろいろ話がありますように、古い物は、関西には、先ほどの脇田先生のお話のようにたくさんあります。もう、腐るほどあります。それに新しいものを、どう付け加えていくのかというのが問題なのではないかという気がします。古い物をもっともっと、磨きをかけていくことが必要ではないかと思えますし、その辺、PREXも考えていきますし、関西におられる方々と一緒に磨きをかけていかなければならないかと考えています。

高阪 章

ありがとうございました。いま2回、それぞれのパネリストの方から、お話を伺っていて、いくつか論点が浮かび上がっていますので、ちょっと話をさせていただきたいと思います。1つは最初に青柳さんのほうからミラノ(イタリア)の話とアトランタ(米国)の話があって非常に面白かったのですが、日本はちょうど歴史的遺産の長さという意味では真ん中へんという感じになるかもしれません。例えば(シーザーが)「ブルータスよ、おまえもか」といって死んだ場所のあるフォーラという遺跡がイタリアのローマにありますが、あのころは、まだ、日本に都市というものがなかった時代ですね。ところがアトランタの話になりますと、これはもう慶長の話ですね。いま世界で一番いい大学だといわれているのは米国のハーバード大学ですが、ハーバード大学が創立された(といっている)のは1638年です。ジョン・ハーバ

ードという人が建てたわけですが、メイフラワ
ー号で着いたのが1620年ですから、ちょう
ど、まだ400年にならないというそういう時
代ですね。

ところで、私は、この間、APECの用事で
オーストラリアの貿易投資自由化の進展度を
チェックするという役割で行って来たんです
が、オーストラリアが貿易戦略として、あるい
は投資戦略として重要視しているのはサービ
スですね。先ほど、大塩平八郎は農本主義だ
ったというお話でした。私もよく知らないん
ですが、農本主義というのは基本的にはビジ
ブルな(目に見える)生産物を生産活動とし、イン
ビブルな(目に見えない)ものをつくるのは生
産的でないという、割と単純な考え方のように
と思います。その点では、社会主義計画経済も
似ていて、最近の中国の国民所得計算 突然、
経済学の話になって恐縮ですが の改訂も、
結局、サービスを相当無視していたのを、サー
ビスは生産的な経済活動なんだということ
を見直すというのが非常に大きな改訂の柱の1
つだったわけです。

いまわれわれが、ツーリズム、あるいは観光
ツーリズムのほうが観光というよりは広
い意味らしく、いま山下さんの話では、観光、
イベント、コンベンション、そういうものは全
部ツーリズムに入って来るという話ですが
の中身というのは、やはり、そういうインビ
ブルな(目に見えない)経済活動が生み出す
価値だと思うんです。オーストラリアがいま貿
易だとか、投資だとかの戦略で重要視してい
るものはサービスで、なかでもどういふところ
にオーストラリアの強みがあるかという、1つ
は教育サービスです。とくに大学教育。英語圏
であるということが1つの強みですね。ですか

らオーストラリアの大学は、ずいぶん東南アジ
アに大学のブランチ(海外分校)をつくってい
ます。もちろんアメリカの大学もペンシルバニ
ア大学とか、ハーバード大学とかいうところが
ビジネス・スクールとか、パブリック・ポリシ
ー・スクールとか、そういうもので東アジアの
高所得国に進出していっているんです。そうい
う目に見えないサービスという価値が1つの
ビジネス・チャンスである。それは別に国策と
いうこともあります。もちろんビジネス・チ
ャンスであるからこそであります。

ちなみに、オーストラリアの場合、先ほどの
国際収支は赤字なんです。ずっとオーストラリ
アは経常収支が赤字で、その赤字はどうやって
賄っているかという、外国の投資家のおカネ
で賄っている。オーストラリアの企業が社債を
発行して、それを外国人が買っているんです。
それは東アジアのケースのような通貨危機に
はならないと考えられています。というのは東
アジアの借金はドル建てだったんです。オース
トラリアの借金はオーストラリアン・ドル建て
です。だから通貨危機に襲われても怖くない。
つまりオーストラリアドルが下がっても、借り
手は損をしないんです(投資家が損をする)。
それでいて、投資する、しないという意志決定
は、結局、オーストラリアの将来性を投資家が
どう見ているかによっているわけです。そのと
きには、やはり、外貨を稼ぐ力を持っているか
どうかというのが非常に重要になります。

(話を元に戻すと)オーストラリアは教育、
サービスという強みを持っている。あるいは豊
かな自然という強みを持っている。歴史はどう
ですかという話だと、アメリカもオーストラリ
アも、あるいはニュージーランドもカナダも、
要するに若い国ですから、たかだか200年、

300年の歴史しかないですが、でも歴史を非常に大事にしている。「一見さん」のわれわれ観光客が訪れも、「ああ、この国の歴史はこんなだったのだな」とわかる工夫がしてある。カナダのオタワに行ったときに、歴史博物館がありまして、その歴史博物館の展示を見ると、どうやってビーバーだとかの毛皮だとか、あるいは鮭だとかの水産物だとか、そういうもので外貨を稼いでいったか。あるいは、そういうものがカネになると知って、どれだけたくさんの移民が入り込んできて、それでインデアンと戦いながらビジネスチャンスを開拓していったかというのが克明かつ平明に展示してあって非常におもしろい。

問題なのは、そこだと思うんですが、われわれは歴史もあり、そのストックもあり、非常に長い歴史、すばらしい歴史遺産を持っている。さっき文楽の話がありましたが、文楽を持っているながら、自分たちの次世代がよく知らないで、外国人が感心するという、何かねじれた現象がありますよね。ここにじつはビジネス・チャンスが滞留しているのではないかなと思います。先ほど山下さんが、しきりにDNAとおっしゃいましたが、DNAは、まあ放っておいてもちゃんと受け継がれていくんですが、こういう文化遺産、歴史遺産というのは意識して知らしめないで伝わらないと思うんです。

先ほどの脇田先生の話は、たいへんおもしろいし、先人がどんなに苦労して、おカネを集めて、発掘して、感動的に残そうと努力されているのがわかるんですが、やはり、われわれの一番の問題は、そういう物が生かされていない。(宝は)あるのに、簡単に言ってしまうと宝の持ち腐れになっている。サービス産業として非常に重要であるというのは、やはり、それはマ

ニアのものではなくて、ジェネラル・パブリックのものにならないといけない。あるいは、ならないといけないかどうかわかりません。そんなポピュライゼーション(大衆化)は要らないという立場もありうるかも知れない。でも、それは1つのビジネス・チャンスだし、それはわれわれの国の将来にとって重要なことだと思うのであれば、やはり、持っている(持っていた)というだけでは駄目で、それを誰でもアクセスできるようにする必要がある。それが、やはり、サービスということだと思うんです。

例えば、単純な話が、いいレストランと悪いレストランの違いというのは、出てくる食べ物だけではないでしょう。どういうタイミングで出てくるか。お客が、どういうタイミングで食べているかというのをちゃんと見ていて、いいタイミングで、さっと出てくるというのが大事でしょう。だから高いんです。そういう目配りのできる人材がちゃんといるから、いいレストランは高い。それがインジブルな付加価値というものです。だから今話を伺っていて(思うのは)、われわれには集積がある、けれども次世代にちゃんと移転ができていますか。それからジェネラル・パブリックにちゃんと知らしめていますか。まさに、そこがソフト・パワーじゃないんですかね。そここのところのインターフェイス、つなぐのに、どうしたらいいのか。その知恵を、どうやって出すかというのが大事なのではないのかと思うんです。

例えば観光もそうですね。観光でランキングをあげようと思えばリピーターがいないと駄目ですよ。子供は段々減りますから。日本が一番速く減っていますが、じつは東アジアもものすごく減っているんです。じつは私はいま、高齢化と経済成長というテーマでやっていま

して、東アジアは2025年から30年ぐらいになったら、殆ど日本に、とくにシンガポールとか、香港、韓国、台湾というのは殆ど、日本と同じになってしまいます。ですから子供の数に頼っているわけにはいかない。パイは大きくなりません。今まではパイは大きくなっていました。パイが大きくなりませんので、例えば観光で国際競争で勝ち抜こうと思ったら、同じパイをどれだけ食い合うかという、やはり、そういう競争にさらされるという側面があるんじゃないかなと思うんです。

われわれは歴史も美術も持っているし、あるいは、近場では地震による危機管理の経験だとか、そういう貴重なソフト・パワーとなりうるものを持っているわけですね。ですから、それを、どれぐらい生かせるか。そんなものは売り物にする必要がないという考え方もあるかも知れません。だけど、やはり、われわれは、そういうのはグローバルに意味があると思うし、グローバルに意味があるからこそ、われわれはミラノまで行くし、万里の長城にも行くし、そういうものは、みんなで分かち合ったほうが、みんなリッチになっていいのではないかなと思います。そんなことをちょっと脇田先生の話と、それから皆さんの話と伺っていると思ったんですが、あまり時間がありませんので、私が与えられているのは5分ぐらいしかありませんが、最後になりますが、会場の皆さんからご質問を受け付ける前に、一言ずつコメントをいただいで、Q & Aに行こうと思いますが、それでは今までの順番を代えて、有田さんから、どうぞ。

有田 典代

高阪先生の発言を聞きながら、文化力をアジアに、国際協力に生かしていくことができたかと考えました。今から10数年前にカンボジアの文化情報大臣のチェンボンさんという方を日本にお招きしたことがあるのですが、チェンボンさんが言われたのは、同じ国の中で殺しあった民族の心をつなぎとめるためには2つの胃袋が必要だ。1つは飢えを満たす胃袋、もう1つは文化を育てる胃袋だ。それに協力をしてくださいと言われました。

そういうお話を思い出しながら、関西が蓄積を生かして取り組めるものは、文化の国際協力だと思います。図書館、美術館、博物館、図書館、神社仏閣などが培っている学習活動、識字教育、生涯学習、文化財保護や修復の技術などを戦争や民族紛争で荒廃したカンボジアやベトナム、アフガニスタン、パキスタンなどで生かすことができれば、アジア全体としての文化力を高めていくことに貢献できるのではないかと思います。

そして、平和構築のための人物交流という点では、例えば、大学において、ヨーロッパにおける「エラスムス計画*」のアジア版のようなものを日本がリーダーシップを発揮して創設する。グローバル化時代に対応した人材育成を、日本だけで考えるのではなく、アジア全体としての人材育成を考え、仕組みをつくっていくことが必要だと思います。また、人物交流に関しては、地球上の多様な民族、異なる文化・宗教の人たちが出会い、互いに違いを認め合い、理解し合い、学びあえる「対話(ダイアログ)の場」を設けていくことを提案したい。意義ある交流の積み重ねが信頼関係の構築になるのですから。

「COP3」を開催した関西からの発信としては、現在もいろんな取り組みがなされていますが、地球環境問題解決のためのフォーラムのようなものをつくり、多セクターのコラボレーションをするのはどうでしょうか。関西にはUNEPのような国際機関、地球環境センターがあり、JICAやPREXがあり、企業や自治体、NGOでもさまざまな取り組みがなされています。が、個々の団体・機関が有する経験やノウハウ、情報が社会全体のものとして共有化されていない。これらが連携することは、課題の所在を明確にし、理念の確立を促し、柔軟で効果的な活動を展開することが可能となります。多セクターがコラボレーションすることによって国際交流・国際協力の意義と内容を広く市民に知らせることにより、市民の理解が促進され、活動への支援者の拡大にもつながります。

関西の文化的魅力をアップさせるためには、木村さんのお話にあった祭りを例にとれば、平城京遷都1300年事業と四天王寺ワツソの連動性を図るなど、点として展開されているイベントを面として展開することでアピール度が高まるのではないのでしょうか。

最後に、関西が国際社会において意義ある存在になるためには、地球社会はどうあるべきかという国際秩序に対する理念と、地域社会をどのようにしたいかというコミュニティへの考え方、そのために、大阪は関西はどのような役割を果たすのかという明確なビジョンを打ち出すこと、そして、そのビジョンに基づいて目標と計画を立てることが重要だと思います。

*注 エラスムス計画 EU諸国における人材育成計画。科学・技術分野における加盟国間の人物交流計画の一環として行われる。学生交流をも含めた大学間交流の促進計画で、198

7年創設。

高阪 章

ありがとうございます。ご意見と陳情が重なったと思います(笑)。ではその陳情された木村さんのほうからお願いします。

木村 勇

昨日、大阪に文部科学省の法人なんですけど、大阪日本語教育センターというのがあります。ここで卒業式がありました。ここでは日本語を教える学校なんです。約300名の方が出られたんですが、校長先生の話聞いてショッキングなことがありました。日本に来る留学生が、どんどん質が落ちてしまっていると、これは、やはり、完全に財政危機の影響だと。文部科学省も、留学生に対する国費留学生の数を減らす。地方自治体も財政危機で、奨学金とか減らしています。やはり、聞きますと、優秀な海外の学生は、みんな、2股3股かけるそうですね。アメリカ、日本、あるいは、どこかの国、一番、彼らが行きたがるのは、奨学金が多いところだそうです。そこで業績をあげて、勉強できる。その点で、私ども財政危機ということで、地方も、国も奨学金が枯渇しています。日本では、そういう優秀な留学生には、与えるおカネが、段々減ってきてまして、国では、以前10万人計画となっていたんですが、もう達成したあとは、質を高めようと言っているんですが、質を高めることは、ご本人の努力であって、私どもは何もできないです。いい学校をつくる、いいシステムをつくるのが、私どもの仕事なんですけど、それがいま、予算的にはできなくなって

しまっているんです。ソフト・パワーと言いな
がら、私どもは、自から留学生政策で予算を減
らしている。おまえ何をやっているんだと言わ
れるかもしれませんが、悲しいですね。結局は
日本に人が来なくなってしまうのではないかと
いうことを校長先生から聞きまして、今後、
どうしたらいいのか。選択と集中しかないな
ということ、少しのおカネを、投入する
ことしかないんですが、他からは持って来れ
ないということになりますと、選択と集中は
いい言葉ですが、選択されるほうは、なくな
るということです。そういう意味で、日本に
対する留学生は、どうするのか。私ども、
文部科学省に聞いても、方針が出ていま
せん。私自身も、大阪市でも、奨学金を
減らしていますから、数が減ってもしょ
うがないというスタンスなんです。だけ
ど、これは、いつかは何とかしなかつ
たら、日本のソフト・パワーは落ちるし、
これは観光など、すべてに影響すると思
うんです。魅力ある国、美しい国とい
うのであれば、できたら私たち努力し
て、もっと留学生の来る国にしたい
と思っています。これは努力目標ですが、

高阪 章

では山下さん、どうぞ。

山下 和彦

最初に有田さんの話を、ちょっとだけ訂正
させていただきたいんですが、札幌のソー
ランよさこい祭は14年前に北大の2年生の
長谷川学君が、高知へ行って、よさこいに
触発されてやりだした。最初、1,000人
だったのが、200万人になっている。いま
おカネが、どう

なっているかということ、札幌市が出して
いるおカネは9%弱です。あとは民間、雪
祭のほうは、どうかということ35%を
札幌市が出していると、こういう状況で
ありまして、やはり、やりようだなとい
う感じがいたします。それが1つ。それ
から、なぜ、交流、ツーリズムが大事か
という問題、先ほど言いました2つのテ
ーマ、人間性の回復の問題と、環境問題
ということに加えて、少子化の対策とい
う問題が1つあります。間違いなく、20
50年には、1億を割り、そして2100
年には、7,000万人ぐらいになるだろ
うと言われていますが、人口が減ること
は、明らかに国のエネルギーが減って
いくということでありまして。これを産
めよ、増やせよというわけにはいきな
い。まだ、どこかで転換点が出てくる
としても、恐らく、21世紀中は、少
子化に悩まなければいけないだろう。
これを言ってみれば、交流人口で、何
とか、この1世紀、がんばりぬいてみ
ようという意志を持ったほうがいいと。
フランスは5,400万人の人口ですが、
観光客が8,000万人フランスに
来ています。計算上、計算式は言いま
せんが、1,000万人で、お客が来たら、
200万人人口が増えたのと同じ計算
式があります。それでいくと、8×2
ですから、1,600万人人口が多いの
と一緒に、表高は、5,400万人の
人口ですが、実高は7,000万人の
人口を抱えているエネルギーを持っ
ているというのがフランスなんです。
国際社会のなかで、さしたる産業も
ないのに、威張っておられるのは、
やはり、ここだというふうにも思
うわけです。とりあえず、そういう
意味で、少子化対策という意味も
込めて、これをやらないといけ
ないということが、もう1つあり
ます。それからもう1つは、国際
収支の問題、いま黒字

だからいいよと、おっしゃっていましたが、物の収支は、現在、確かに10兆円の黒字です。ところがODAで1兆円出るでしょう。それで観光収支で、3兆円の赤字なんです。ですから日本の国際収支は現在、6兆円内外というのが、現在の相場なんです。ところが物の出入り勘定が、いつまでも黒字基調でいられるかどうかというのは、これはなかなか、わからない。中国の問題、アメリカの問題、いろいろあります。日本の経済の問題もあります。ですから、少なくとも、観光収支のマイナス3兆円ぐらいは、速やかにイーブンにしなければならないということがあるわけで、ピジット・ジャパン・キャンペーンが始まったのも、そのせいなんです。じつは悪かったのは、その前に、逆さまのことをやっているんです。黒字が貯まってしまって、もう、あっちからこっちから言われてしょうがないから10ミリオン計画、1,000万人を外に出しましょう。ジャブジャブ、カネを外で使ってこいと言った20年ほど前のツケが、いまここへきて、来ているわけです。逆さまのことを、いま安部内閣が言い出しているわけです。ですから、そういう方向に来ているということは、1つ考えなければいけない。それからもう1つ、このツーリズム産業、交流産業とでもいうのか、これは非常に優れて、労働集約型なんです。これからロボットなんかが出てきて、どんどん省エネが流行ってきますが、ここだけは労働集約、やはり、おもてなしの心というものを伝えなければならないから、これはロボットでは伝わらないわけです。そういう意味では、労働集約ということにおいて考えると、雇用創出の安定的な供給ということの可能性も大いにあるということでもあります。そして最後に言いたいのは、1965年あたりから始まったマ

ーケティングの考え方、これはモダン・マーケティングと言っていますが、基本的に歩むべき方向一般を決めると。そのためにどうするか。調査と分析ということを中心にやってきたんです。ところが時代のうねりが、早すぎるものだから、人々の心移りが速すぎるものだから、調査、分析だけでは、どうしても後追いのマーケティングになりかねない。言ってみると、極端なことを言うと、昨日の天気予報みたいな部分も出てくる。昨日が雨だったか、天気だったか、別に聞かなくても、わかっているわけですね。そういうマーケティングでは、どうも、これからやっていけないということで、ポスト・モダン・マーケティングというような考え方が、いまジワジワと出てきているのが、主軸になるのは、創造性がなければアカンと。それからもう1つは、芸術性がなければイカンと。そして分析力よりも、むしろ大事なのは、洞察力であるというような考え方が、いまジワジワと出てきております。具体的に何をやるか。魅力アップを、どうするかというようなことを考えなければいけないときに、調査、分析で、どう考えるかというのでは、どうも後追いになる。従って、創造的、クリエイティビティいっぱい、そして芸術性の高い、洞察力を持った仕組み、そういう仕掛けを考えていくということが、ソフト・パワーを送り出していく根源になってくるんじゃないかというふうに考えています。

高阪 章

最後になりましたが青柳さん。

青柳 明雄

山下さんのソフト・パワーの話聞いていて、そんなこと、私にできるかどうか、私自身は自信がありませんが、失敗から学ぶということがありますので、きょう、いろいろと皆さんがおっしゃっているように動かなければいけない、活動をしなればいけない、継続しなければいけない、工夫が必要だということから、私の失敗を1つお話をします。

12月の1日でしたが、タイの副首相兼工業大臣さんがお越しになりまして、そのときに、一緒にサティットさんというタイの投資委員会の長官が来られました。それで会議の席上、正面に座りました。「どこかで見たな、この方、一度、会っているな」と私は思いました。向こうも私の顔を見て、どこかで会ったなと、ニヤツとしているんで、何だったかなと思って、よくよく聞くと「あんたの顔をテレビで見たよ」。私も「あんたの顔をテレビで」。要はテレビ会議をやっているんですね。先ほどご紹介した人材育成事業のときに、向こうはタイの代表として、何かあいさつを、私も関西の経済界の代表としてあいさつ。だから顔はわかっていたんです。どこで会ったかが、覚えていない。ところがあとで調べたら、そのサティットさん、なんとPREXの研修のOBだったんです。なんの研修ですかね。10数年前にPREXへ研修にこられていた。よくご記憶で、「三田さん、元気ですか」「元気でやっていますよ」という会話がありました。ということで、IT技術を導入して、これは井上さんがリードしていただいて「もっとIT技術を利用して、しっかりした研修をやるんじゃないか」ということでやっている。その私自身が、IT技術に踊らされたというか、大失敗をいたしましたので、そういう

こともあったということをご報告します。

もう1つ、危機感ですが、あまり、こういう話をしてはいけないのかもわかりませんが、いまアメリカの国務省では、親中派が、圧倒的に親日派を凌駕しているそうです。親中派だらけだそうです。殆どが。あの人は親日派、よく日本をわかっている方というのは、少ない。それは、なぜかということ、アメリカ政府が、まず、自分たちを知ってもらわなければ、中国との関係はうまくいかないと判断して、すでに相当前から、中国の方を呼んできて、国務省で研修させているそうです。そのときに日本からは殆ど、そういう研修に行きたいとも言わなかったし、呼んでくれとも言わなかった。これはまず、自分のことを知ってもらわなければ、人は自分の意見を聞いてくれないよということを示している1つの大きな例だと思います。関西に来ていただいて、観光でも、あるいは、ビジネスでもいい、そのときに、私どもが、そういうアメリカ国務省的な努力をしているかどうか。これは経済界としても大きく考えなければいけないなと思っています。幸いなことに名前は申しませんが、関西の有名な企業は、「最近、留学生、日本で勉強していらっしゃる留学生でもいいですよ、インターンの方でもいいですよ、ぜひ、私のところに就職したかったら、相談に来てください。ホームページを開いています。それから逆に、いま関西で、日本で、勉強している外国人の方で、国に戻って、私どもの会社に入りたい方も、相談してください。それから逆に日本人で、日本人だけど、海外の、あの国で働きたいなという人も、応募してください」ということで企業の人材登用に対する考え方も、ずいぶん、グローバルになってきていますので、かなり時代は変わってきたなと思っています。

高阪 章

ありがとうございます。もう10分しかありません。ご質問のある方、挙手していただいて、その方々のご質問をまとめて受けさせていただくということにさせていただきます。4人ですかね、4人の方にマイクをまわしてください。

参加者1

NHKのテレビで、5人の関西の知事が話しておられたのを聞きましたら、ご自身たちの集団、つまり県庁になるんですか、ハウツーは強いけれど、ホワイの掘り下げがイマイチだと、こうおっしゃっていました。皆さん自分で、そうおっしゃっていました。そういうところ辺で、ホワイの議論を国際交流ということでも、もうちょっとしたらどうかと思います。

その意識の1つですが、日本を始めとして東洋では、500年、1000年、同じ歴史、言語、文化を共有する集団としてずっと来ているわけですね。韓国も、そうでしょう。いわゆる白人の、西洋人の国というのは、そうじゃないですよ。カフカという文学者は、その人はユダヤ人ですね。大学で勉強して、小説を書くのはドイツ語ですね。国籍はというとチェコですね。こういう3つの国に跨ってというのは、日本ではあまり考えられないかなと。そういうことを引け目に感じることも真似ることも入りませんし、手ごわい相手のことは知っておかないとアカンやろうと。そういう辺りで、国際交流というのは、和気藹々の仲良しではなくて、われわれ人間は、社会性生物としていますから、その根っこは、そういう意味の本能的バトル、相手をやっつけるのではなくて、自分のための

仲間増やしだと。それをみんなで議論して結論を出す必要がないんですが、ホワイの議論もしてほしいかなと思います。クリントン大統領のあとのほうの国務長官のマーサー・オルブライトは、確かポーランドの2世か、そんなものですね。フィリピンから来られて、外務大臣をしておられる。こういう感覚ですから、相手は、そういう国なんだなという議論があるかなと、それがホワイに結びつかないかなということです。

参加者2

2つありまして1つは、関西の魅力、関西の文化ということ盛んに言われて、これを皆さん、紹介する必要があるという、きょうの主張を聞いていまして、非常に矛盾を感じました。ODAでJICAからおカネをもらって、PREXが研修をやっているわけですが、残念ながら観光という部分は、予算がつかない。これからますます減るという方向にいておるのが現状だと認識していまして、せっかく、これから観光でもわざわざ日本に来て大阪城を初め、文楽や、そういうものを見て帰ってくださればお国に帰って、PRして、また、来ようかというようなこともあろうかと思しますので、そのODAの税金を使っていますので無駄遣いはしたらいけないという考えだと思んですが、これに対して、皆さんのコメントをいただけたら。もう1つは大阪市の木村さんに質問ですが、確か同済大学が、今度、大阪に分校をつくる。これは非常にいい話だと思うんですが、その今後の予定とかわかりましたらお願いします。

参加者 3

木村部長さんにお伺いしたいのですが、私は先月、中国の高校生数10名を1ヶ月ほど受け入れまして、1週間ほどプログラムを企画いたしました。1つは日本の高校で、中国の高校生とのディスカッションを受け入れる先、もう1つは単なる寺社仏閣とか、茶道、華道とかの文化体験ではなくて、中国の高校生は、それを支える家元制度というか、ビジネスのようなものも説明を求めているんですが、そういうことを話をしてくださる先の選定などが難航しました。大阪市さんでは、修学旅行生を海外から誘致することに非常に熱心であると伺っていますので、具体的に、今後、関西での受け入れ皿の拡大とかを、どのようにお考えなのかをお教えいただきたいと思います。

参加者 4

歴史があって、遺産があって、ストックがあってという、その話はよくわかりましたし、それには、どう知恵を出して、いかにアクセスするかという、その話も、よくわかったんですが、それではその先の展望というのは、いったい誰がつくって、どういうふうな環境の基にやるかという、こういう疑問を解かない限り、話は前進しないんじゃないかと思えます。ちょっと文楽にこだわるんですが、じつは大阪にも子供が文楽をやっているのが例えば和泉市でやっていたり、今度、講演をやったりとか、それから文楽座の近くの高津小学校は地元ということでやっていたりとか、それから能勢は江戸時代からの、これは大人のやつがあって、いま子供も始めていますが、そういう非常に隠れた遺産

的なものがあるんですが、それじゃあ、これをまとめて、どこがやるか。大阪市は絶対にやらないと思うんです。よその市のことまで面倒を見られませんかというし、まして、広告代理店がそういうことをやるかという、こんな儲からない仕事はやりませんというと思います。それじゃあNPOさんに任すかという、これはまた、口はあっても、あまり力がないかもわからないから、恐らくやらないでしょう。そうすると結局、そういうものが宙に浮いたまま、結局、遊びの言葉として何となく浮遊しているというような、そういう印象があるわけです。甲子園の大会というのは、じつは、これは歴史に詳しい方、ご存知かもわかりませんが、ワールドカップのサッカーよりも歴史は古いんですね。今年で89回ですか。まあ新聞社と私鉄という2つの企業が、大正年間の、そういう1つの文化として創造したわけですが、なぜ、それが90年近く経て関西の地で、そういう風土がありながら、育たないのかという。まあ企業、組織、団体の問題があるんですが、結局、私は個人的には、人の問題ではないかと思うんです。やはり、旗を振って、おもしろがってやってくれる人、そういう人が、船場の旦那衆の話も含めて申し上げれば、大阪にいなくなったのではないかということ。その辺は、もう、きょう壇上にいらっしゃる方も含めて、何かそういうおもしろいことに先頭を切って走るような方が、どういう格好でつくればいいのか、そういうことにお答えがあれば教えていただきたいということです。

高阪 章

最後に脇田先生、お願いします。

脇田 修

さっき言い忘れたんですが、私ども日本史をやっていると、各国の日本研究者と仲良くなるんです。そのときに言われたことで、1つ思い出しました。それは日本の友人方は、少し仲良くなると、みんな、仲良くならなくてもご馳走をしてくださる。ところが、そのご馳走は、家の外でしてくださる。そんなことをして欲しいとは、私は思わない。そんなことよりも家へ呼んでほしい。そういうことを言っていた。これは日本研究者ですから、とくに日本人が、どういう生活をしているか見たいんだろうと思うんですが、それを思い出しました。確かに、そういえば私は、外国へだいぶん行きましたが、大抵、友だちの家へ呼んでもらって、それでご馳走なんかでないですよ。お酒だけ飲んで、みんな会話を楽しむだけです。日本語をしゃべってくれる友だちばかりなんです。ちょっと、その辺、それは一言申し上げて置こうと思いました。

高阪 章

お答えをお願いします。木村さんから。

木村 勇

まず、同済大学の件ですね。中国の大学が日本へ来て、分校をつくるという話なんです。じつは非常に彼らは現実的です。来る以上は、土地を出せ、学校を出せ。例えば立命館が別府

に行きましたね。地元が土地も出しましたね。校舎をつくるカネも、そういうことは基本的には、商売ベースで考えたほうがいいと思うんです。役所だからカネを出す時代ではありませんし、役所がカネを出して、そして学校がつぶれたら、これは市民の税金の無駄使いですから。いまの同済大学は来る可能性はあります。それは某私立大学とも、連携しながら来ると思います。それから文楽も先ほど、私はその話を聞いて、役人として、無力を感じるんですが、役所ははっきり言いますと、自分の権限外のことは、なかなかしようとしません。いまお聞きしまして、そういう方は、ぜひ、NPOをつくるべきです。私は役人でありながら、そういう方に「ハイ、おカネを出しましょう」とは絶対にできません。だから私は、日本の場合でも、辛いんですが、いまの役所は、おカネをばらまく余裕がないんです。これは私らの責任もあるんですが、だから基本的に、そういうグループさんは、自分でやらないとしょうがないんです。プロデューサーは自分でやる。私は、きょう日豪交流年事業誌を持ってきましたが、そこに日本文化セミナーというのがあると思います。それは大阪の人、私と同じ年の人ですが、自分で一生懸命文化活動をやっているんですが、かれは自費で現地へ行ってもらったんです。それでモナシユ大学で、私は先生に頼み込んで、そういうセミナーを開いたんです。絶対に大阪人はできません。役所に頼らなくてもできます。私たちは、そういう海外へ行きたい事業とかがありましたら、お手伝いをします。地元を信じてください。そこがしてくれるかどうかわかりませんが、情熱を持ってやってください。それが日本を救う道だと思しますので、役所がしてくれないから、やらないというのは、それはアカンと思い

ます。私も役人ですが、したいけど、できない状況が、たくさんありますので、役人がしてくれないから、しないんじゃないかと、ぜひ、なんらかの形で、つづけてください。文楽に目が開かれるかもしれないし、これは保証できませんが、お願いします。

有田 典代

私は、公益活動をすべて官が担う時代は過ぎ、これからの公益活動は、官と民(市民、NPO、企業など)が積極的に担う時代であると思います。ただ、財源の確保と人材の育成の課題があります。特に、公益活動を行うNPOにとって活動資金の確保は大きな課題。今後、NPOの資金確保と密接に関係してくるのが、新しい公益法人制度の施行です。公益法人制度が変わり、これまで以上に公益活動の質が問われてきます。寄附文化も活発化し始めると考えられます。NPOが独立したセクターとして育っていくためには、NPO自身はビジョンを明確にし、運営の透明性を図り、信頼性を高める努力をしていく。一方、社会も広く民間による活動支援を促進していくことが必要です。また、私どものような中間支援組織がNPOを育てる努力、力量形成、活動環境整備を行うことが必要でしょう。

高校生の修学旅行における文化体験の受け入れについてですが、このpiaNPOには約30のNPOが入っており、環境保全、人権擁護、子ども支援、外国人の相談をはじめ、舞台芸術のNPO、アートNPOを支援するNPO、中国と交流するNPOなど活動は多様です。piaNPOの目的の一つに、国際理解の促進、教育機関との連携があり、小中高校の総合学習から

社会見学、大学のフィールドワークまで受け入れ、入居団体に話をしてもらいます。私どもの会員団体にも日本の文化理解を促進するための取り組みをやっているNPOがありますので、相談に来てください。ODAに観光予算がつかないという話ですが、観光の捉え方にもよるのではないですか。文化財保護等にはつくようになってきていますので、切り口の問題ではないかと思います。あとは専門家がいらっしゃるのでお任せをしたいと思います。

山下 和彦

私はいつも、こういうことを言っているんです。関経連だとか、同友会だとか、もう祝詞の時代は終わったと。いろいろ提言書をつくるのは上手だと。だけでも、そこでしまってしまったら、もうアカンと。祝詞をあげても、今頃、「おーと」と神主さんが言って、神さんが降りてくるというようなことになっているけれど、祝詞では、もう神さんが降りてこないよと。各々が身丈にあったところで具体的に何かをやると。これは、どうしても何かをやるというのはおカネが付き物ですから、そんなに大それたことはできないということであれば、それはそれでいいと。少しがんばったところでやってみようと。身丈にあったところだというのは、私は、そういうことだと思うんです。一人ひとりが身丈にあったところで何かを具体的にやるということになると、それが集積して、たいへん大きなエネルギーになってくると思いますから、もう、皆さん、評論家にならずに自分たちのできること、細かいことでも何でもいいから、身丈にあったところで、自分に合うところでやってみると。これが大きなエネルギーを生むのではない

でしょうか。

青柳 明雄

先ほどミラノ市長の話をしました。そのときに、私が個人的に感じたのは「このやろう、いい格好ばかり言って」と思いました。それで見返してやろうと思ったんですが、1人ではできない。3年計画を立てまして、3年目にミラノにおける関西展というのを挙行しました。1年目に観光誘致、2年目は産業誘致、ステップを踏んで、3年目にやりました。3年間、ミラノにこだわるのに、何か意地があるのかと思われるぐらいにこだわった結果、大阪府知事も、来ていただいたし、京都府知事も来ていただいたし、主な方にも参加いただいて非常に現地で受けがよかったんです。いま、そのミラノとの関係はまだまだ、連綿としてつづいています。やる気があって、道を探していけば、絶対にうまくいくと、そのときには、じつは大阪府の支援も得て、文化関係の方、三味線とお琴でしたかにも来ていただくことができました。やり方、仕組みづくりが必要だと思います。文化、観光という、おカネがかかりそうです。私の経験から言いますと、アメリカにいましたときも、日本ででも、外国人が来た時に、家ですが、お茶を出しました。お薄です。自分で、目の前で、お薄を立ててあげて、みんな飲みつけないから、「苦いな」と妙な表情を見せるんですが、私は、これは禅でいうと、これを飲み干すことによって、世界を飲み干すことになるんだよ。これが禅文化であると説明しています。おカネのかからないこういう知恵があるということをお教え申し上げます。

井上 義國

さっきハウツーからホワイというお話がありました。ホワイではなくて、ホワットではないかと思うんです。何をやるのかということだと思います。ですから、先ほどもどなたかおっしゃいましたように1つずつ、結局、やっていくしか手がないわけですし、PREXがやっているのは、企業の中堅マネージャーの育成に重点を置いた人材育成の協力をやるということをやっています。「ミドル・マネージャーの育成なら、まず、大阪へ行けや」という、そういうことにアジア、太平洋地区が、まず、なってくれることを、われわれは願いにしております。

事実、ODAのカネを使うのが、主体なんです。最近では年に、2つか、3つは、途上国のほうが旅費と滞在費は、自分で持つから、PREXで研修をしてくれというふうな依頼が、舞い込んでくるようになりました。こういうものが、どんどん増えていくと、中堅マネージャーを育成しようと思ったら、まず、PREXに出せやというふうな風潮ができれば、それでもう、相当、関西のPRになるわけです。だから何をやるのかということを決めて、小さなことを1つずつ積み重ねていくということが大事なのではないかということです。

文楽の問題も出ましたが、文楽も、義太夫、長唄というのは日本人が聞いても、よくわかりません。最近、日本語のスーパーインポーズを付けるということが、とうとう成立したみたいで、あれも義太夫の関係者、文楽の関係者が、ずいぶん反対したようではありますが、外国人にはフランス語で、英語で付けるとかがありますが、日本人がわからないわけですから、日本語のスーパーインポーズを付けることによって

文楽の理解を、さらに深めて、広げて行こうという活動が始まりました。だから、関西が文楽の源だと言うなら、文楽を国際観光の中の1つの目玉にしようではないかということで、どんな工夫を凝らし、どんなPRをすれば、そのために人が来てくれるのかとか、そういうホワットというのを、これから1つずつ学んでいくのが大事なんではないかと思っています。PREXも、その1つでありまして、今後の、ご後援をよろしくお願いします。

高阪 章

ありがとうございました。30秒だけラップアップの形を取らせていただきます。1つ、脇田先生から、国際交流というのは基本的には、一番根っこところは、個人と個人の交流で、これは自分の普段の生活がちゃんとお互いに理解できあえるということが1つ大事なことだというご指摘を頂きました。もう1つ私が指摘したいのは、とくに若い世代が非常に重要な役割を果たすと思うのですが、一番、日本人で心配なのは、対話力が非常に落ちていて、1対1でパーソナルに対話をする能力が、次の世代が非常に欠けているという点です。教師根性で「いまどきの若い者は…」という感じなのかもしれないですが、(対話力が)欠けています。ですから恋人同士でも、お互いにマンガを見ているとか、なかなか目と目を合わせてしゃべることが苦手になってきている。これは非常に危ないので、個人と個人がちゃんとコミュニケーションできるというのはほんとうの基本なんです、その大本のところはぐらぐらしている、そこのところは、われわれも教育者として何かやる必要があるかなというふう

に思っています。ちょっと時間のマネージメントが悪かったんですが、最後のほうで、だいぶ盛り上がってきましたから、それはお許しいただくとしまして、私の司会の役割は、これで終りとさせていただきます。ありがとうございました。